

# ローマ、ビジョンを確立 - ナンバー・ナイン

基礎を退ける：『The Daily』をめぐる論争と、アドベンチストの預言における真理否定の帰結

Jeff Pippenger

2024-08-21

私たちは現在、ローマのさまざまな象徴をめぐるアドベンチスト史の中で起こった論争の預言的な流れを扱っている。現在はダニエル書の「the daily」を扱っている。その論争は、アドベンチズムの土台の拒否、「預言の霊」の権威の拒否、そして神に選ばれた使者の拒否を表している。ミラーの働きを退けることはまた、1798年にダニエル書の封印が解かれ、知識の増加によって生み出されたメッセージの理解へとミラーを導いた天の御使いたちがミラーに与えた教えを拒否することをも意味する。

テサロニケ第二において教皇権の現れを抑えていた力（異教ローマ）を特定する真理を退ける者たちは、真理を愛していないことを示しており、真理への愛を拒んだゆえに偽りを受ける。その偽りが彼らに強い惑わしをもたらす。偽りが原因であり、彼らが受ける強い惑わしは結果である。真理への愛の欠如が彼らの動機である。その偽りは、絶対的真理を信じる者とは対照的に、聖書の教理を多元的に受け入れるという選択を表している。だからこそ、イザヤはパウロのいう強い惑わしを、単なる一つの惑わしではなく複数の惑わしとして表している。もう一方の人々は真理を愛し、絶対的真理という前提を受け入れ、イザヤによって神の言葉におののく者として示されている。

主はこう言われる。天はわたしの御座、地はわたしの足台である。おまえたちがわたしのために建てる家はどこにあるのか。わたしの憩いの場所はどこにあるのか。というのは、これらすべてはわたしの手が造ったものであり、こうしてすべては存在するからだ、と主は言われる。しかし、わたしが目をとめるのはこの人、すなわち貧しく、砕かれた霊を持ち、わたしの言葉におののく者である。牛を屠る者は人を殺す者のようであり、子羊をささげる者は犬の首を折る者のようであり、供え物をささげる者は豚の血をささげる者のようであり、香をたく者は偶像を祝福する者のようだ。まことに、彼らは自分の道を選び、その魂は自分たちの忌むべきことを喜んでいる。だから、わたしも彼らの迷いを選び、彼らの恐れているものを彼らの上に臨ませる。わたしが呼んだとき、誰も答えず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。むしろ、わたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだからだ。主の言葉におののく者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたを憎み、わたしの名のゆえにあなたがたを追い出した兄弟たちは、「主が栄光を現されるように」と言った。しかし主はあなたがたの喜びのために現れ、彼らは恥を見る。イザヤ書66章1-5節。

神の御言葉におののく者たちはイスラエルの追いやられた者たちであり、終わりの日には旗印として表される者たちである。

彼は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四隅から集める。イザヤ書11章12節。

神は、汚れた供え物をささげている者たちが自分たちが建てたと主張するその家を、お造りになったのは御自身であるとはっきりお示しになる。彼らは「主の神殿はこれらだ」と宣言するとき、その家を頼みとする。

主の家の門に立ち、そこでこの言葉を宣べ、こう言え。「主を礼拝するためにこれらの門から入って来るユダのすべての者よ、主の言葉を聞け。」万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる。「あなたがたの道と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの所に住ませる。『主の宮だ、主の宮だ、主の宮だ』という偽りの言葉に頼ってはならない。」エレミヤ書 7:2-4。

偽りの言葉に「信頼」を置く者たちは、偽りを信じる者たちである。主が建てられた家は、主がまた造られた土台の上に据えられた。神が呼ばれたときに応えることを拒んだ者たちは、自分たちの道を選び、忌むべきことどもを喜んだ。エレミヤが、内を歩むべき道はただ一つだと述べたときに、彼らは「道」と「忌むべきこと」を複数形で選んだ。

主はこう仰せられる。道々に立ち、見渡し、昔の道を尋ねよ。どこが良い道かを問い、そこを歩め。そうすれば、あなたがたの魂は休みを見いだすであろう。しかし彼らは言った、「私たちはそこを歩まない」と。さらに私はあなたがたの上に見張りを立てて、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは言った、「私たちは耳を傾けない」と。それゆえ、国々よ、聞け。会衆よ、彼らのうちに何があるかを知れ。地よ、聞け。見よ、私はこの民に災いをもたらす。すなわち彼らの思いの実を。彼らが私の言葉に聞き従わず、私の律法にも耳を傾けず、それを退けたからである。シェバからの乳香や、遠い国からの香料の葦が、何のために私のもとへ来るのか。あなたがたの全焼のささげ物は受け入れられず、あなたがたのいけにえも私には喜ばしくない。エレミヤ書 6:16-20

第十五章で、エレミヤは、耳がありながら聞こうとしなかった邪悪な会衆を「嘲る者の会衆」と呼んでいる。この会衆には、第一と第二の天使のメッセージの歴史においても、さらに第三の天使の歴史においても、「見張り人」が与えられたが、彼らは古い道筋、すなわち良い道を歩むことを拒んだ。むしろ彼らは「多くの道」を歩んだ。このため、イザヤは、彼らが古い道筋という唯一の道ではなく複数の偽りの道を選んだゆえに、神が複数の惑わしをお選びになると示している。イザヤの証言が示すとおり、嘲る者の会衆の礼拝は主に退けられる。ホワイト姉妹は、イザヤの複数の惑わしをパウロの「強い惑わし」と直接結びつけ、それを、主が築き、その上にご自身の家を建てられる土台である基礎的な真理の拒否という文脈に位置づけている。

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない。まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼らの忌むべき行いを喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」  
イザヤ書66:3、4;テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12.

天の教師は問いかけた。「実際には世俗の方策に従って多くのことを行い、エホバに対して罪を犯しているのに、自分は正しい土台の上に建てており、神が自分の業を受け入れておられるのだと思い込むこと——これ以上に心を惑わす強い迷妄がほかにあるだろうか。ああ、かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違えるとき、人の心をとらえるのは、大いなる欺きであり、魅惑的な迷妄である。彼らは自分たちは富み、財にあふれ、何一つ必要としていないと思い込んでいるが、実際にはあらゆるものを必要としているのだ。」

衣を汚れのないままに保っている忠実なしもべたちに対して、神は変わっておられない。しかし、多くの者は「平和だ、安全だ」と叫んでいるが、その一方で、突如として滅びが彼らに臨もうとしている。徹底した悔い改めがなく、人々が罪を告白して心をへりくだらせ、イエスにあるとおりの真理を受け入れないかぎり、彼らは決して天に入ることはない。私たちの間に清めが行われるとき、私たちはもはや、富んでおり、財が増し加わって、何一つ必要がないと誇って、安逸に安住することはなくなる。

『私たちの金は火で精錬され、私たちの衣は世から汚されていない』と真実に言える者は、いったい誰か。私は、私たちの指導者が、いわゆる義の衣を指し示しておられるのを見た。それらを脱がせ、その下にある汚れをあらわにされた。すると彼は私に言われた。「彼らが自分たちの汚れと品性の腐敗を、いかに見せかけで覆い隠しているか、あなたには見えないのか。『忠信の都が、どうして淫婦となったのか！』わたしの父の家は商売の家とされ、神の臨在と栄光の去った場所となっている！このゆえに弱さがあり、力が欠けているのだ。」 『証言』第8巻、249、250頁。

その箇所では、エレミヤのあざける者の会衆はラオデキア人、すなわち愚かな乙女たちとされている。

「愚かな乙女たちに象徴される教会の状態は、またラオディキアの状態とも呼ばれている。」 レビュー・アンド・ヘラルド、1890年8月19日。

愚かな乙女たちは、真夜中の叫びが到来するとき、これまで自ら選び取ってきた道に沿った惑わしを受け、エレミヤの古い道を退けることで、油がないことを露わにする。古い道にこそ安息と憩いが見いだされ、その安息と憩いは後の雨である。

私は、第三天使のメッセージが終わろうとしている時を指し示された。神の力がその民の上に臨んでおり、彼らはその働きを成し遂げ、目前の試練の時に備えていた。彼らは後の雨、すなわち主の御前からの潤いを受け、生ける証がよみがえっていた。最後の大きな警告は至る所に響き渡り、そのメッセージを受け入れない地の住民たちを奮い立たせ、激怒させた。『初期の著作』279頁

聖霊の注ぎの時、真理を愛さず、そのため真理ではなく偽りを信じることを選んだ愚かなラオデキアのおとめたちに、強い惑わしが注がれる。真理を退けることは律法を退けることに等しい。なぜなら、神の律法は神の預言的な規定のうちに体現されているからである。

啓示とは、新しいものの創造や発明ではなく、それが明らかにされるまで人間には知られていなかったものの顕現である。福音に含まれる偉大で永遠の真理は、たゆまぬ探求と、神の前に自らを低くすることを通して啓かれる。聖なる教師は、真理を求めへりくだった者の心を導き、聖霊の導きによって、御言葉の真理がその人に知らされる。そして、このように導かれること以上に確かで有効な知識への道はない。救い主の約束はこうであった。「真理の御霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真理に導く。」私たちは、聖霊が与えられることによって神の御言葉を理解するようにされる。

詩編作者はこう書いている。「若者はいかにして自らの道を清くできるのか。それは、あなたの御言葉に従ってその道を心して守ることによってである。私は心を尽くしてあなたを求めました。どうか、あなたの戒めから迷い出ることのないようにしてください。……私の目を開いて、あなたの律法のうちにある驚くべきことを見させてください。」

私たちは、隠された宝を捜し求めるように、真理を求めるよう戒められている。主は、真理を求める真の求道者の悟りを開いてくださり、聖霊はその者が啓示の真理を把握できるようにしてくださる。詩篇の作者が、自分の目を開いて、律法のうちにある驚くべき事柄を見させてくださいと願うとき、彼が意味しているのはこのことである。魂がイエス・キリストのすぐれた御徳を慕いあえぐとき、心は、より良き世界の栄光を把握する力を与えられる。神なる教師の助けによってのみ、私たちは神の御言葉の真理を理解することができる。キリストの学校にあつて、敬虔の奥義の理解が与えられるがゆえに、私たちは柔和でへりくだることを学ぶ。サバス・スクール・ワーカー、1909年12月1日。

後の雨のメッセージやその方法を拒むことは、神の律法を拒むことにほかならない。エレミヤが「彼らはわたしの言葉にも、わたしの律法にも耳を傾けず、むしろそれを退けた」と述べたとき、彼はホセアと同じことを言っている。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

愚かな者たちが拒むのは、終わりの時に起こるとダニエルが指摘した「知識の増加」である。1798年の終わりの時、そして1989年の終わりの時にも、神が並行するこれら二つの世代それぞれの土台を築かれる際に用いることを選ばれた使者によって、その知識の増加は体系化された。これらの基礎的真理は、それぞれの歴史において選ばれた使者に啓示されたある聖書的規則によって組織化され、その基礎的真理こそがエレミヤの言う「昔からの道」であり、最終的には「真夜中の叫び」と「大いなる叫び」のメッセージの油を表す真理である。「後の雨」は、十四万四千人の封印の歴史において「真夜中の叫び」のメッセージを生み出し、その後、なおバビロンにいる神のほかの群れを集める歴史において「大いなる叫び」のメッセージを生み出す。「後の雨」はメッセージであると同時に、そのメッセージを生み出す方法論でもある。ダニエルの「知識の増加」は、三段階の試練の過程を開始する。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたは自分の道を行け。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封じられているからだ。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。しかし、知恵ある者は悟る。」ダニエル書12章9節、10節。

ダニエルの悪しき者たちは、自分たちのラオデキヤ的状态を保ち続けることを選んだ、マタイの愚かな乙女たちである。彼らの状態は、賢い者も悪しき者も共に試される、ダニエルの三つの試練の第三段階で明らかになる。最後の試練では裁きが執行され、両者が油を持っているかどうか明らかになる。

「さらに、これらのたとえは、裁きの後には猶予期間がないことを教えている。福音の働きが完了すると、直ちに善と悪の分離が起こり、両者の運命は永遠に定められる。」『キリストの実物教訓』123頁

第三の試練で示される品性によって、礼拝者が愚かなラオディキア人か賢いフィラデルフィア人かが見分けられる。最終の試練は、後の雨の方法論によって明らかにされた後の雨のメッセージと相まって行われる。後の雨の方法論を退けることは、人を、後の雨のメッセージを理解できない立場に置く。メッセージと方法論は、イザヤによって最終の試練として示されている。

彼は誰に知識を教え、誰に教えを悟らせるのか。乳から離れ、乳房から引き離された者たちにか。命令に命令を重ね、命令に命令を重ね、規則に規則を重ね、規則に規則を重ね、ここで少し、そこで少し。ども唇と別の言葉で、彼はこの民に語られる。彼は彼らに言われた、「これこそ、疲れた者を休ませる安息である。これこそ、いこいである。」しかし彼らは聞こうとしなかった。それゆえ、主の言葉は彼らにとって、命令に命令、命令に命令、規則に規則、規則に規則、ここで少し、そこで少しとなった。彼らが行って、後ろへ倒れ、砕かれ、罨にかかって捕えられるためである。それゆえ、エルサレムにいるこの民を治める嘲る者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたは言った、「われらは死と契約を結び、よみと協定を交わした。押し寄せる鞭が通り過ぎても、それはわれらに及ばない。偽りを避け所とし、虚偽の陰に身を隠したからだ。」それゆえ、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはシオンに、基として一つの石を据える。試みを経た石、尊い隅のかしら石、確かな基。信じる者は慌てることがない。わたしは測り縄として裁きを、下げ振りとして義を据える。雹は偽りの避け所を一掃し、洪水は隠れ場を押し流す。あなたがたの死との契約は取り消され、よみとの協定は立たない。押し寄せる鞭が通り過ぎるとき、あなたがたはそれに踏みにじられる。イザヤ書 28:9-18。

聖書の預言における「押し寄せる災厄」とは、アメリカ合衆国で間もなく制定される日曜日法を発端として始まる、段階的に進行する日曜日法の危機のことである。「真理を愛する」心を持たず、そのゆえに知識の増加を拒む愚かで邪悪なラオデキヤ人は、「押し寄せる災厄」は自分たちには「来ない」と信じている。なぜなら、ほかに理由はあるが、とりわけ彼らは、聖書の預言におけるローマの象徴についての誤った定義を受け入れることを選んだからである。そうすることで、彼らは自分たち自身の預言的土台に基づく偽りの預言モデルを作り上げた。

彼らの土台は砂の上に築かれており、その砂は無数の細かく砕かれた石を象徴している。

賢い者の土台は、ただ一つの岩の上に築かれている。

私に与えられた神の恵みによって、熟練した建築家のように、私は土台を据え、ほかの者がその上に建てています。ただし、各人はどのようにその上に建てるかに注意しなさい。すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外に、だれもほかの土台を据えることはできません。さて、もしだれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、干し草、わらで建てるなら、各人の業は明らかになります。その日はそれを示すからです。というのは、それは火によって現され、火が各人の業がどのようなものであるかを試すからです。コリント人への第一の手紙 3:10-13

偽りの土台は、まことの土台と対比されている。そのまことの土台とは、岩なるキリスト・イエスである。真の土台か偽りの土台かは、ダニエルの三つの試練の最後に明らかにされる。それは「火によって明らかにされる」-突然ご自分の宮に来られる契約の使者の火によってである。そのとき、死と契約を結んだ者たちの群れが現れ、いのちの契約を結んだ者たちの群れも現れる。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求めている主が、突然その宮に来られる。見よ、あなたがたが喜ぶ契約の使者が来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日にだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立ってられようか。彼は精錬する者の火、布さらしの者の灰汁のようだからである。彼は銀を精錬し清める者として座して、レビの子らを清め、彼らを金や銀のようにきよめて、彼らが義にかなうささげ物を主にささげるようにする。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年月のように、主に喜ばれるものとなる。わたしはあなたがたに近づいてさばきを行い、魔術を行う者、姦淫する者、偽って誓う者、賃金で雇い人をしいたげる者、やもめとみなしごをしいたげる者、寄留者の権利を曲げる者、そしてわたしを恐れぬ者に対して、すみやかな証人となる、と万軍の主は言われる。マラキ書 3:1-5。

ダニエル書の試験の過程が第三の試験に達し、賢い者と悪しき者が試される時、契約の使者は審判において近づいて来る。ダニエル書の三段階の試験の過程は、ダニエル書の封印が解かれ、知識が増し加わる終わりの時に始まる。知識の増加は、ラッパを吹き鳴らす選ばれた使者の働きによって明確にされる。その使者は、マラキによって、契約の使者の到来に先立って道を備える「使者」と呼ばれており、契約の使者は火によって、だれが彼と契約に入ったのか、あるいは死と契約を結ぶことを選んだのかを明らかにする。ミラー派の歴史において、1844年10月22日にキリストは突然ご自身の神殿に来られた。これは、やがて来る日曜法を予表する道標である。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

ダニエルの三つの試練の最後は、目前に迫る日曜法の時に起こる。その時、契約の使者が到来し、レビ人の文脈において、いのちと死のいずれかと契約を結んだ者が誰であるか

を火によって明らかにする。マラキが、マタイの賢い乙女たちと愚かな乙女たち、すなわちヨハネのラオデキア人とフィラデルフィア人、そしてダニエルの賢い者と悪しき者を描写するとき、両者とも火によって試され、そのとき誰がレビ人であり、誰がそうでないかが明らかになる。

レビ人は、金の子牛をめぐる二度の反逆において忠実に立った者たちの象徴である。最初の反逆はアロンのもので、二度目はヤロブアムの反逆である。どちらの挿話においてもレビ人は忠実な者を表し、またこの二つの挿話は、間もなく来る日曜法の時にレビ人によって表される一つの群れの忠実さに関する二つの証しを与える。アロンは金の子牛を作った。金はバビロンの象徴であり、子牛は獣の像である。彼は祭りを制定し、愚かな民はその子牛の回りで裸になって踊った。彼らの反逆のすべては、選ばれた使者であるモーセを退けたことを土台とし、その拒絶によって動機づけられていた。

モーセはアロンに言った。「この民はお前に何をしたのか。どうしてお前は彼らの上にこれほど大きな罪をもたらしたのだ。」アロンは言った。「わが主よ、どうかお怒りを燃やさないでください。あなたはこの民をよくご存じです。彼らは悪に傾いています。彼らは私に、『私たちの先に立って行く神々を作ってくれ。というのも、このモーセ、私たちをエジプトの地から導き上ったあの者がどうなったのか、私たちにはわからない』と言いました。そこで私は彼らに、『だれでも金を持っている者は、それを外せ』と言いました。すると彼らはそれを私に渡し、私はそれを火に投げ入れました。するとこの子牛が出てきたのです。」モーセが民が放縦になっているのを見たとき（アロンが彼らを敵の前で恥をかくまで放縦にさせていたからである）、モーセは宿営の門に立って言った。「主につく者はだれか。私のもとに来なさい。」するとレビの子らは皆、彼のもとに集まった。彼は彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう言われる。各々、腰に剣を帯び、宿営の中を門から門へと行きめぐり、各々その兄弟を、友を、隣人を打ち殺せ。」レビの子らはモーセの言葉どおりに行い、その日、民のうちからおよそ三千人が倒れた。出エジプト記 32章21-28節。

踊っていた者たちは、自分たちの「裸の恥」を露わにしたラオデキヤ人であり、それは第六の災いの警告、すなわち現代のローマを竜・獣・偽預言者という三重の構成として正しく理解する必要性を告げる警告である。その警告は、第六の災いとハルマゲドンに関する真理を破壊したユライア・スミスの私的解釈と鋭く矛盾している。

自らのラオデキア的状态を表した者たちは、選ばれた使者の權威を退け、また、「the daily」というサタンの象徴をキリストの聖所の務めの神聖な象徴だと同一視する者たちと同じ混乱した理解を示した。彼らは自分たちの救いを象徴的な神に帰したが、彼らが礼拝することを選んだ神はエジプトの神の象徴であり、エジプトは竜の象徴である。ラオデキア的アドベンティズムと同様に、彼らは「the daily」が異教ローマ、すなわち竜の象徴であるという真理を退け、そのサタンの象徴をキリストの象徴だと見なした。

人の子よ、エジプトの王ファラオに向かって顔を向け、彼とエジプト全土に対して預言せよ。言え、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはおまえに敵対する、エジプトの王ファラオよ。おまえは、その川々のただ中に横たわる大いなる竜で、『わたしの川はわたしのもの、わたしは自分のためにそれを造った』と言った者だ。エゼキエル書 29:2、3。

アロンとともに背いた者たちは、金の子牛で表された竜の象徴こそが、自分たちをエジプトの奴隷状態から救い出した神であるという偽りを信じた。ラオディキア的アドベンチズムは、異教ローマ（竜）の象徴、すなわち「the daily」で表されるものが、天の聖所における務めにおいて人々を罪の束縛から解き放つ働きをなさるキリストの象徴であるという偽りを信じている。彼らはまた、選ばれた使者を退けた。「the daily」の象徴性をめぐる論争でラオディキア的アドベンチズムがそうしたのと同様に。

ラオディキア的アドベンチズムの第一世代（1844年から1888年）において、彼らは「七つの時」を特定するミラーの働きを退けた。第二世代（1888年から1919年）には、「日ごとのもの」の真理を退ける過程を始めた。第三世代（1919年から1957年）には、「あなたの民を略奪する者たち」はアンティオコス・エピファネスであるとする背教的プロテスタント主義の理解に逆戻りしていた。2001年9月11日、その日に第三の災いが到来したとき、彼らは聖書予言におけるイスラムの役割を退けた。これら四つの真理はそれぞれミラーによって支持され、ハバククのものに示されており、いずれもホワイト夫人が「選ばれた者」と呼ぶミラーの働きに帰せられる基礎的な真理である。

ヤロブアムの反逆は、ヤロブアムを最初の王とした十の部族から成る北王国の成立当初に始まった。ヤロブアムは金の子牛を二つ作り、一つをベテル（「神の家」を意味する）に、もう一つをダン（「裁き」を意味する）に据えた。ベテルとダンは合わせて、教会（ベテル）と国家（ダン）の結合を表している。また、アロンの反逆のときと同様に、その子牛はバビロンの象徴である金で作られ、いずれも獣の像であった。アロンのときと同様に、ヤロブアムは年ごとの祭りを制定し、その子牛を、神の民をエジプトから救い出した神々だと称した。

ヤロブアムは心の中で言った。「今や王権はダビデの家に戻ってしまうだろう。もしこの民がエルサレムの主の家に上っていけにえをささげるなら、この民の心は再びその主人、すなわちユダの王レハブアムに向き、彼らは私を殺して、再びユダの王レハブアムのもとに帰ってしまう。」そこで王は相談し、金の子牛を二頭作って民に言った。「あなたがたがエルサレムに上って行くのは大変だ。イスラエルよ、見よ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ。」彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。このことは罪となった。民はその一つの前で拝むために、ダンにまで行ったからである。彼は高き所のための家を造り、レビの子孫ではない民のうちの最も卑しい者たちを祭司に任じた。ヤロブアムは第八の月の十五日に、ユダにある祭りに似た祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげた。彼はベテルでもそのように行い、自分が作った子牛にいけにえをささげ、また自分の造った高き所の祭司たちをベテルに配置した。こうして彼は、第八の月の十五日に、すなわち彼が自分の心で考え出して定めたその月に、ベテルで自分が造った祭壇の上でいけにえをささげた。彼はイスラエルの子らのために祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげ、香をたいた。列王記上12:26-33。

ヤロブアムは「自分の心に思い巡らした」。これは、彼の預言的モデルを築くために「私的解釈」を導入したユライア・スミスの働きを象徴している。ヤロブアムはアロンの型に倣い、その結果、エジプトの神を真の神として誤って示した。アロンとヤロブアムが作り出した神は、国家権力と教会権力というローマの二重性を表す象徴の誤用にに基づいてい

た。アロンもヤロブアムも、獣の像という象徴を用いて、竜の権勢の像を指し示していた。こうして、これら二つの反逆に関する聖史は、神の民に課される大いなる試練を表しており、その試練によって彼らの永遠の運命が決せられる。靈感によれば、その試練とは獣の像の形成をめぐる試練である。

『あなたの民の略奪者』としてのローマという象徴をめぐる最初の論争は、1843年の先駆者図表に盛り込まれたもので、本来は略奪者はローマであるにもかかわらず、アンティオコス・エピファネスこそがその略奪者だと主張していた。最初の論争は、『あなたの民の略奪者』がローマであることをめぐる最後の論争をも体現しており、そこでは、略奪者はローマではなくアメリカ合衆国だと今では主張されている。ところが、ダニエル書11章10～15節ではアンティオコスはアメリカ合衆国の象徴であるから、誰が象徴されているのかについての最初の偽りと最後の偽りは同じである。

終わりの時にアンティオコスが何を象徴していたのかをめぐる暗闇と混乱は、アロンとヤロブアムの反逆がそうであったように、獣の像をめぐる混乱を生み出す。獣の像をめぐる混乱は、神の民にとっての大いなる試練が獣の像の形成であるまさにその時に起きている。

主は、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示してください。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。あなたの立場は矛盾だらけの寄せ集めであり、欺かれる者はごくわずかだろう。

黙示録13章において、この主題は明確に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗印のもとに列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を放棄して日曜日の安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。Manuscript Releases 第15巻、15。

ホワイト夫人が、「the daily」は異教ローマを表すというミラーの見解を支持したとき、彼女は、1844年以降、「他の見解」（複数）が受け入れられ、それが「闇と混乱」を生み出したと述べた。異教ローマ、すなわち「あなたの民を奪う者たち」を象徴する「the daily」に関する誤った見解は、ローマとローマの像の区別に関して混乱と闇を生み出す。

ローマの象徴をめぐる最初と最後の論争は、退けられつつあったかつての契約の民と、その時まさに神の新しい契約の民となりつつあった民との間で起こった。その論争には、確立された文法規則に従おうとしない態度も含まれていた。というのも、プロテスタントは第十四節の「also」という語を認めず、その結果、盗賊は前の諸節で表されているのと同じ権力でなければならないと主張したからである。

アンティオコスを「盗賊たち」に無理に当てはめたとき、それは聖書の曲解を意味していた。それは私的解釈であった。というのも、真理に反する誤った教理はすべて私的解釈だからである。その論争自体が基礎的真理となった。なぜなら、それは1843年の先駆者の

図表に記録されたからである。靈感によってその図表が承認されたことは、「盗賊たち」がローマの象徴であることを確証し正当化するとともに、その真理の重大性をいっそう際立たせた。というのも、その教理を拒むことは、基礎と「預言の霊」の権威の双方を拒むことだったからである。

「あなたの民を略奪する者たち」がローマを表しているという正しい理解は、天使たちがウィリアム・ミラーに与えた預言のモデルに付け加えられた。というのも、それは彼が理解し提示するに至った預言のモデルと一致しており、すなわち、異教ローマと教皇ローマが彼のすべての預言的適用の基礎であるというものであった。

ダニエル書11章36節の北の王をフランスとし、さらに40節ではトルコとするというウリア・スミスの独自の解釈は、北の王の誤った二つの同定から成っていた。1863年にスミスが基礎を退けたことは、預言の最も基本的な規則を見えなくさせる盲目を彼にもたらした。その規則とは、概してキリストの時代頃から、預言は古代の文字どおりの実体によって予型化された現代の霊的実体を描写する、というものである。パウロは、先に来るのは文字どおりのもので、その後に霊的なものが来ると述べ、この真理を明確に教えた。

しかし、最初にあるのは霊のものではなく、自然のものであり、その後に霊のものがあるのです。コリント人への第一の手紙 15章46節

スミスは、神の民として背教したプロテスタントに取って代わった契約の民に属していたが、七つの時を退けて1863年の図表を導入したとき、彼らの反逆を擁護した。彼の私的解釈を適用した結果、黙示録第16章のハルマゲドンについての誤った理解が生じ、これはローマを正しく理解しているかどうかを測るもう一つの試金石となった。

略奪者をめぐる最初の論争において、スミスは、十人の乙女のたとえの最初の成就に関与していた人々を代表していた。したがって、北の王に関する彼自身の見解によって、彼は、1856年から1863年の間に、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会となっていく中で見過ごされつつあった契約の民を代表している。略奪者の論争におけるプロテスタントの場合と同様に、スミスは、自分の私的解釈でねじ曲げたその箇所を文法的権威を無視した。というのも、文法的には、31節から45節における北の王は、常に、そして唯一、教皇権だからである。

「the daily」をめぐる論争に伴い、「the daily」がキリストの聖所における奉仕を表しているという古いプロテスタントの見解を擁護するために、ウィリー・ホワイトとA・G・ダニエルズによって虚偽がアドベントの歴史に持ち込まれた。その特定の歴史はHabakkuk's Tablesで特定されているが、誤った見解の推進と確立に伴う偽りの証言に留意することが重要である。というのも、正しい理解はミラーが『テサロニケ人への第二の手紙』において認識していたものであり、そこでは真理を愛する者と偽りを信じる者との対比が問題とされているからである。

“the daily”をめぐる論争は、ローマの最終的な論争が聖霊の注ぎの時に起こるといって、積み重ねられてきた理解をさらに裏づけている。上から聖霊が注がれている一方で、下からの力が台頭し、強い惑わしにすぎないにもかかわらず、それを神の力だとして受け入れる者たちを支配している。

対立する二つの大いなる勢力が働いている。一方は下から、他方は上からである。すべての人は、そのどちらかの密かな影響下にあり、その行為は、それを引き起こしている靈感の性質を明らかにする。キリストと結び合わされている者は、常にキリストの方針に沿って働く。サタンと結びついている者は、その指導者の靈感のもとに働き、聖霊の力と働きに敵対する。人間の意志は行動する自由に任されており、その行動によって、どの霊が心に働きかけているのかが明らかにされる。「彼らの実によって、あなたがたは彼らを知るであろう。」『1888年資料』1508頁

“the daily” をめぐる論争における預言的な対比とは、竜の象徴をキリストの象徴と同一視することにある。真理を拒む者は、この真理を見いだしたミラーの役割も同時に拒んでおり、その結果、聖霊を拒み、赦されない罪を犯している。

次の記事では、2001年9月11日の直後に起きたローマをめぐる論争を取り上げます。

私たちは、いのちがこの上なく尊く、またこの上なく興味深い時代に生きている。すべての物事の終わりは近い。驚くべき展開が、目に見えないはたらきが激しく活動しているゆえに、絶えず私たちの目の前で次々と起こるであろう。深きところからの暗闇の力は人間の器に働きかけ、悪しき人々は悪しき天使と協力して、神の戒めとイエスの信仰に戦いを挑んでいる。同時に、上からの力もまた、神の感化に身をゆだねようとする者たちに働きかけており、神の民は天の知性ある存在と協力している。この終わりの時代に、すべての人の魂に臨んで彼を試み、試す重圧に耐え抜くことができるのは、真実な本物の信仰以外にない。神こそ私たちの避け所でなければならない。私たちは、形式、告白、儀式、地位に頼ることはできないし、生きているという名を有しているからといって、試練の日立つことができるとはならない。揺り動かされ得るものはことごとく揺り動かされ、この終わりの時代の欺きと惑わしによっても揺り動かされないものだけが残る。魂を永遠の岩にしっかりと結びつけよ。キリストにおいてのみ安全があるからである。イエスは、私たちが生きているこの時代を危険な時代だと描写された。彼は言われた、「ノアの日のように、人の子の来るのもそのとおりである。洪水の前の日々、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁がせたりしていたが、ノアが箱舟に入ったその日までそうしており、洪水が来て彼らをみなさらってしまうまで悟らなかった。人の子の来るのもそのようである。」また、「同様に、ロトの日にも、人々は食べ、飲み、買い、売り、植え、建てていた。しかしロトがソドムから出て行ったその同じ日に、天から火と硫黄が降り、彼らをみな滅ぼした。人の子が現される日も同様である。」さらに、「人の子がその栄光をもって来、すべての聖なる御使いたちも彼とともに来るとき、彼はその栄光の座に着く。彼の前にはすべての国民が集められ、彼は羊飼いが羊と山羊とを分けるように、人々を互いに分け、羊を右に、山羊を左に置く。そのとき王は右にいる者たちに言う、『わが父に祝福された者たちよ、世の基が据えられた時からあなたがたのために備えられている御国を受け継ぎなさい。』」この世での私たちの歩みが、かの地での永遠の運命を決定する。私たちが神の御国を受け継ぐ者たちの側にいるのか、外の暗闇へ去っていく者たちの側にいるのかは、私たち自身に委ねられている。神は私たちの救いのためにあらゆる備えをしてくださった。ゆえに、無限の代価によって購われたその恵みに、私たちもあずかろう。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどにこの世を愛された。それは、御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」 Youth Instructor, 1893年8月3日

